

# 木 × 仏像 飛鳥仏から円空へ——日本の木彫仏1000年

2017年4月8日(土)―6月4日(日)



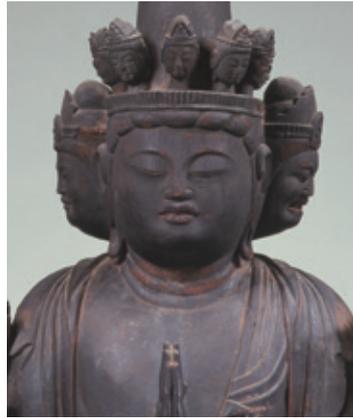
1



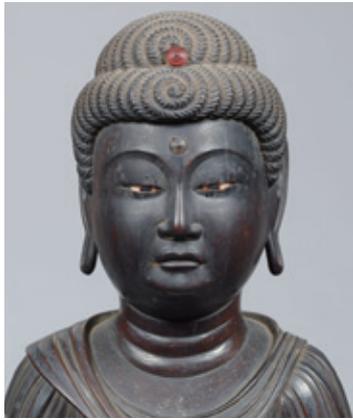
2



3



4



5



6



7

1. 菩薩立像 飛鳥時代 東京国立博物館  
Image : TNM Image Archives
2. 重要文化財 伝薬師如来立像 奈良時代  
奈良・唐招提寺(展示期間:5月9日-6月4日)
3. 重要文化財 宝誌和尚立像 平安時代  
京都・西住寺
4. 重要文化財 千手観音菩薩立像 平安時代  
滋賀・阿弥陀寺
5. 重要文化財 釈迦如来立像 玄海作  
鎌倉時代・文永十年(1273) 奈良国立博物館
6. 十一面観音菩薩立像 円空作 江戸時代
7. 重要文化財 十一面観音像 像内納入木札 平安時代  
滋賀・誓光寺

仏像には様々な素材が用いられますが、日本では木を素材とした仏像、木彫仏が長い歴史を通じて造られ続けました。これは日本の仏教美術の際立った特徴ともいえます。本展では日本に仏教が伝来した飛鳥時代から江戸時代までの木彫仏約70体を展観することで、1000年の歴史の中で人々がどのように樹木に祈りをささげ、どのような木材を仏像に用いてきたのかを振り返ります。

樹木は人間にとって身近な存在であり、かつ、その崇高な姿は祈りの対象ともなりました。そもそも、木は仏教とも密接なかわりを持ちます。釈迦は無憂樹に手をかけた摩耶夫人の右脇から誕生し、菩提樹下で成道、沙羅双樹のもとで涅槃に入ったと伝わるように、その生涯の要所は樹木によって彩られます。また、経典類には仏像に白檀など特定の木材の使用を規定するような記述も見られます。こうした背景を持ちながら、日本の木彫仏は木に対してさらに強いこだわりをもって造像されたことを見て取ることができます。

今回展示する仏像には、木と仏像のかかわりについて深く考えさせられる作例を含みます。用材に特定の樹種の木材を意図的に選択したと考えられる例や、寺社の建築部材等を転用することで古材の持つ霊験性を仏像に転嫁させようとしたことがうかがえる作例、あるいは木材から仏像を造り始める儀式「御衣木加持」の痕跡と思われる木札を像内に納入する例などです。

さらに、仏像の修理時に得られた知見や樹種同定調査、年輪年代測定など最新の調査成果を踏まえた展示で、木と仏像についてより深い理解を目指します。

このようにたくさんのお見どころをご用意する本展には重要文化財20件以上を含む総数約70体の木彫仏が勢揃いします。展覧会に初めてお目見えする仏像や普段は拝観の難しいお像にもお出まします。そして約半数が大阪にゆかりの仏像です。木と仏像を鍵として日本文化の本質を探るこの企画、どうぞご期待ください。

(児島大輔)

会期中に展示替えがあります。詳細は当館ホームページをご覧ください。

## ◆講演会

4月22日(土) スペシャルトーク  
木×仏像×修理

講師: 八坂寿史氏(公益財団法人美術院 西洞院工房長)

4月29日(土・祝)  
日本×木×仏像

齋藤龍一(当館主任学芸員)

5月6日(土)  
御衣木の文化史

児島大輔(当館学芸員)

時間: 各日とも午後2時から午後3時30分

会場: 美術館1階 講演会室 定員: 150名

申し込み不要(先着順)・聴講無料。ただし、当日の本展観覧券が必要です。